様式 C-19

# 科学研究費補助金研究成果報告書

平成 23 年 6 月　6 日現在

機関番号：１２６０３
研究種目：研究活動スタート支援
研究期間：２００９年 度　～ ２０１０年 度
課題番号：２１８２００４９
研究課題名（和文）
1920 年から 30 年代の日本における表現主義受容
研究課題名（英文）
Reception of German Expressionism between the 1920s and 1930s in Japan
研究代表者: 西岡　あかね(NISHIOKA AKANE)
東京外国語大学　大学院　総合国際学研究院　講師
研究者番号：３０５５２３３５

研究成果の概要（和文）：

日本国内およびドイツにおける文献学的調査と個別作品分析を通して、1920~30 年代の日本における表現主義受容の全般的傾向と各作家におけるさまざまな受容のアスペクトを明らかにした。具体的には、当時の新聞、雑誌記事を主な資料として、大正期の日本における表現主義受容・紹介の傾向とその変化を明らかにした。更に、上述の調査で得られた資料を織り込みつつ、表現主義の「叫びの美学」が日本の新劇シーンでそのように受容されたかを明らかにした。個別研究の分野では、村山知義の初期戯曲に関する論考を完成させた。

研究成果の概要（英文）：

A general tendency and various aspects of Expressionism receipts in Japan in the 1920~30's were clarified through a philology investigation in Japan and Germany and the individual work analysis (Tomoyoshi Murayama and the Expressionism drama in the *Tsukiji* mini-theater).

交付決定額

（金額単位：円）

| | 直接経費 | 間接経費 | 合　計 |
|---|---|---|---|
| 2009 年度 | 790,000 | 237,000 | 1,027,000 |
| 2010 年度 | 660,000 | 198,000 | 858,000 |
| 年度 | | | |
| 年度 | | | |
| 年度 | | | |
| 総　計 | 1,450,000 | 435,000 | 1,885,000 |

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：各国文学・文学論
キーワード：ドイツ文学、日独比較文学、表現主義文学、1920~30 年代

## １．研究開始当初の背景

大学院修士課程に進学して以来、私は表現主義の文学を研究対象としてきた。博士課程在学中は主に初期表現主義の抒情詩を扱い、これを、1880 年以降の西欧における美的モダニズムの発展過程の中で捉えようと試みていた。博士論文では、ゲオルク・ハイムとその周辺作家、及びゴットフリート・ベンを取り上げ、彼らの詩文において、言語表現の刷新が人間像の理念的な革新と連動している様を論じた。その際、ゲオルク・ハイムとフ

ランス自然主義（特にゾラ）との関係に注目したことをきっかけに、比較文学の方法と視点を研究に取り入れるようになった。

その後、博士論文では視野に入ってこなかった、表現主義の「運動体」としての側面と、その前衛的性格に研究の焦点を合わせるようになった。そこで、新興芸術家の分離派的グループ形成、雑誌創刊、小劇場の創設、朗読会や文学キャバレーの開催といった、表現主義における組織的芸術活動の諸相について調べ始めたが、その過程で特に、初期表現主義における文学キャバレーの興隆に注目した。まず、博論との兼合いも含めて、ハイムの参加していた「新パトスキャバレー」の研究を進め、続いて、文学キャバレー興隆の裏にある表現主義文学の美学的特徴、すなわち言語の音声的側面と感覚性の再評価について論じた

この研究の過程で、表現主義の文学キャバレー構想の特徴をより明らかにするため、これをイタリア未来派のヴァリエテ構想や、ロシア構成主義のチルクス劇場構想などと比較・対照したが、その際、20 世紀の前衛芸術運動の同時代性、あるいは国際的並行性に気づかされた。この問題に興味を持った私は、表現主義と同時代の他の前衛芸術運動との関係や相互交流の様子を調べ始め、前衛芸術運動の国際的同時代性・並行性の広がりが、ヨーロッパの中心部からいわゆる辺境（主に東欧）へ、更には東アジアにまで及んでいることに興味を持った。そこで、特に日本の前衛芸術に関する文献の調査を行ったが、大正期における新興芸術運動については、近年、特に美術史の分野で研究が進んでいることを確認した。また、日本文学史の分野では、大正期のモダニズム文学研究との関連で、当該分野に関する書誌的研究書やカタログ、アンソロジーの出版が行われていることも分かった。しかし、こと表現主義文学に関しては、その影響力は強調されているものの（なぜなら作家達が「表現主義」についてあちこちで語っていたので）、個々の作家の表現主義受容の背景や様相を文献学的な源泉調査や個別の作品分析にまで踏み込んで行った研究はほとんどないことに気づいた。

この研究上の空白を埋めようと、表現主義の文学キャバレーや劇場の研究と並行して、大正期の演劇分野における表現主義受容に深くかかわった作家や新劇シーンについての研究を進めた。このような断片的な考察を通じても、日本における表現主義受容は、単なる受容・紹介・翻訳の枠を超える文化創造性を持っていたことが明らかになってきた。また、表現主義が移入された過程も、様々な社会的・政治的背景を持つ作家の地理的・文化的移動を媒介とした、一つの直線的な発展過程としては捉えられない、複合的かつダイナミックな運動生成過程をなしているのではないかと考えるにいたった。換言すれば、大正期の日本における表現主義受容を検討する際には、日本での受容過程のみを独立させて考察したのでは不十分であり、移動・越境した個々の作家が体験したであろう、同時代のドイツや周辺国における、表現主義をめぐる状況と照らし合わせてみる視点が必要だと考えた。本研究は、従来あまりにも簡単に語られることの多かった「表現主義の影響」を、このような複合的視点から具体的かつ詳細に論じることで、大正期の新興芸術運動の研究に新たな視点を提供するものである。

## ２．研究の目的

本研究の目的は、1920 年代から 30 年代(大正末期から昭和初期)にかけての日本における、ドイツ表現主義の受容の諸相を明らかにすることである。具体的には、当時の新聞・雑誌等における表現主義の批評や紹介、表現主義の文学作品の翻訳、翻訳劇の上演、更に、個別の作家の「表現主義的」(と銘打った、あるいはそう目されている)作品を研究対象として、表現主義というヨーロッパの芸術潮流が、どのような経緯で同時代の日本に移入され、その後どのように日本の文化的土壌で展開して行ったかを検証したい。

以上にその骨子を述べたように、本研究は、同時代の東アジアの社会・文化状況なども視野に入れつつ、1920 年代から 30 年代にかけての日本で、ドイツ表現主義がどのように受容されたかを明らかにしようとするものだが、研究を進める際、特に重点的に論じられるべき点として、以下の三点が挙げられる。

① 1920 年代から 30 年代当時の日本で、Expressionismus という概念・用語が、どのような条件下で、どの様に翻訳、定義されていったのか。
② 個別の作家が当時、一種の流行となっていた「表現主義」を翻訳、解釈、受容する過程で、この「外来」の文学・芸術潮流がどの様に内面化されていったのか。
③ ②と関連して、異文化の翻訳という行為そのものを問うことにも繋がるが、はたして「日本の表現主義」というものの存在について語ることが可能なのかという問題。

上述の様に、本研究は、ドイツの一文学潮流が、言語や文化、地理上の国境を越えて、同時代の日本に運搬された状況や様相に注目している点で、比較文学研究のカテゴリーに属するといえる。しかし、その際、単に両者の二元的関係を文献学的、あるいは作品解釈的に証明することを目標としているのでは

ない。従って、発信国に重点を置いて、「表現主義」という「特殊ドイツ的」潮流を同時代の日本の受容者がいかに「正確に」理解していたかを問題にすることはしない。また、受容国に重点を置いて、同時代のドイツの文学動向からの影響を、日本近代文学史の中に正確に位置付けてゆくという視点を取ることもしない。むしろ、「発信国―受容国」という図式からはみ出してしまうような関係性や「ずれ」に注目し、受容・翻訳という行為の持つ文化的創造性を問題としたい。また、受容者の側から「ドイツの表現主義」の運動に光を当てることで、ドイツ文学史の枠内では抜け落ちていた、表現主義運動の様相を明らかにしたい。

３．研究の方法

本研究は大きく二部に分けて考察を進める。第一部では、１９２０年から３０年代の日本において、“Expressionismus”という概念がどのように翻訳、定義されていったのか、また翻訳・紹介された際に、それがどのように受け止められてきたのか、どのような反響をよんだのかをあわせて論じる。

大正期の日本における表現主義紹介が広範なものであったことは、既に酒井府氏の書誌的研究『ドイツ表現主義と日本』（早稲田大学出版部、2003 年）によって明らかにされているが、氏の研究でも、他の美術史関係の論考でも、当時“Expressionismus”という概念の翻訳語に揺らぎがあったことは考慮されていない。当時の論考には「表現主義」という訳語と「表現派」という訳語の二つが主に用いられているが、この語の選択には、単なる訳の違い以上の意味はないのだろうか。また、この二つの語が示す内容も多様だったが、本研究では、当時の様々な“Expressionismus”定義や理解の質や正確さを問うのではなく、それら相互の矛盾や意味のずれを問題としたい。なぜなら、そうしたずれのなかにこそ、各受容者が、“Expressionismus”という概念を通じて、いかなる美学上の理念や文学に関する考え方を確立しようとしたかが透けて見えると考えるからである。これによって、翻訳という行為がもたらす文化的葛藤と、その創造性を明らかにしたい。

第二部では、翻訳の文化創造性という問題を深化するため、それぞれ異なる文脈で「表現主義」と関わりを持った作家の個別研究を行う。具体的には、以下の作家と作品群を研究対象とする。

１．村山知義の初期作品：村山知義が大正期の表現主義需要にはたした役割については異論の余地がないが、彼の「表現派風の」初期戯曲そのものの分析を中心に据えた研究はこれまでほとんどなかった。従って、これらの作品に、その程度彼の表現主義への関心や批判が反映されているかは明らかになっていない。本研究ではこの点を、村山のベルリン滞在時の表現主義体験と照らし合わせつつ論じる。

２．秋田雨雀とエルンスト・トラー：秋田がトラーの戯曲に心酔していたことは知られているが、彼の作劇法が、表現主義の戯曲と接したことでどのように発展していったかをたどる。また、彼の表現主義理解を通じて、表現主義受容が社会主義的民衆劇場運動に与えたインパクトを探る。

３．「叫び」の美学の翻訳：表現主義派翻訳劇の分野で最も熱心に受容されたが、その際に注目を集めたのが「叫び」の美学である。ここでは、築地小劇場周辺の作家、翻訳者、批評家のテクストを基に、当時の受容者が、「叫び」という限度の意味伝達行為の極限に位置する言語行為をどのように日本語という別の言語に移し替えようとしたのか、またその過程で自身の演劇言語への省察を行っていったさまを論じる。同時に、この翻訳行為が、日本語による新劇の展開に与えたインパクトを明らかにする。また、表現主義のさまざまなアスペクトのうち、なぜ「叫び」という要素が日本の受容者の注目を集めたのかも、当時の社会的状況と照らし合わせながら考察する。

４．大正期における朗読文化：３との関連で、大正期における朗読文化についても考察を行う。表現主義の美学は、言語の音声的側面や感覚性に注目することで、文学的コミュニケーションのあり方を問題化したが、同様の傾向は、日本における表現主義受容の拠点となっていた、築地小劇場周辺の作家の間にも見られる。この間の事情に注目し、両者の間に何らかの関連性があるのかを検討する。

１～４までは、直接的に表現主義とかかわりを持っていた作家を扱ったが、その他、直接的関連性の薄い作家や作品群を扱うことで、大正期において、「表現主義・表現派」が一種の流行となって行った様子にも目を向ける。

５．横光利一『表現派の俳優』（新感覚派と表現主義の映像的造形感覚）：横光利一の言語の映像性については多くかたられているが、ここでは当時話題となっていた、表現主義の映像作品のデフォルメされた造形感が新感覚派の言語にどのような痕跡を残しているかを、「表現派の・・・」と銘打った短編小説を手掛かりに考察する。

## ４．研究成果

平成21年度は、まず、当時の新聞、雑誌記事を主な資料として、大正期の日本における表現主義受容・紹介の傾向を考察した。その際、すでに叢書の形で集成されている資料を補足するため、近代日本文学館及び東京芸術大学図書館で資料の調査と収集を行った。

その結果、「表現主義」という概念に、多分に誤解をも含みつつ、様々な解釈が施されていた様子が明らかになってきた。特に受容の傾向に関しては、大正初期には紹介・事項に即した記述が主に行われていたのに対し、大正10年前後からは、各受容者自身の立場や問題意識を反映した形の受容が見られるようになり、更に社会運動・労働運動の高まりと並行するかたちで、表現主義への共感が多く語られるようになっているという印象が得られた。この傾向は、大正12年の関東大震災を契機に強まっており、大正期の日本で表現主義が集中的に受容された背景を考察する上で興味深い事象となっている。この間の考察については、資料が当初の予想より多岐にわたっているため、その総括は今後の課題となっている。

また、上述の調査で得られた資料の一部や小山内薫の表現主義論を織り込みつつ、表現主義の「叫びの美学」の日本での受容を扱った論文（ドイツ語）をまとめた。本論文は、クリスティーン・イヴァノヴィッチと山本浩司によって翻訳された論集『翻訳・トランスレイション』（2010年）に発表された。

個別研究の分野では、村山知義の初期戯曲に関する論考を完成させるため、ベルリン州立図書館で収集した資料をもとに、彼のベルリン滞在中の劇場体験を精査した。この結果、これまで村山のベルリン体験を論じる際、唯一の典拠とされてきた、自伝の記述に修正を迫るような資料も発見された。

平成22年度は、昨年度ベルリン州立図書館・新聞部門で行った調査結果を裏付けるため、共立女子大学所蔵の北村喜八旧蔵図書の調査を行った。この研究成果を取り込んで、村山の初期戯曲に関する論考を完成させ、『東京外国語大学論集』第81号に（2010年）発表した。

上述の研究に加えて、表現主義の映像や造形感を同時代のモダニズムの視覚芸術(絵画、写真、映画など)と比較しつつ、それらが大正期と昭和初期の日本においてどのように受容されたかについても調べ始めた。当初、この研究は個別研究の５に関連して始めたものであったが、研究の過程で、安井仲治らを中心とする京阪神におけるモダニズム写真家たちと、彼らが昭和19年に撮影したユダヤ人亡命者たちの写真に関心を持った。そこで、本研究の主旨からは多少外れるが、モダニズムの造形感の日本における受容と異文化や他者との対峙という本研究の主なテーマと関連した応用研究の一環として、上述の写真群における他者のイメージとその映像的造形について論じ、2010年9月に、ドイツ文化会館で行われたシンポジウム「東アジアにおける亡命」で発表を行った。この発表原稿は来年度に出版予定である。なお、この研究の出発点となった、表現主義の映像的造形感覚の日本における受容については今後の研究課題としたい。

## ５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計２件）

西岡あかね：「村山知義の初期戯曲における表現主義受容」、『東京外国語大学論集』81（2010）、229-24Ｉ頁　（査読：有）

西岡あかね：Georg Heym in Selbstdarstellung und literarischer Überlieferung. Über die Künstlerinszenierung im Frühexpressionismus. Hofmannsthal-Jahrbuch 16 (2009)、107-234 頁 (査読：有)

〔学会発表〕（計１件）

西岡あかね：Jüdisches Exil aus der japanischen Perspektive、シンポジウム「Exil in Ostasien (1933-1945)」、2010 年 9 月 17 日、ドイツ文化会館（東京）

〔図書〕（計２件）

Christine Ivanovic／Hiroshi Yamamoto (編)：Übersetzung – Transformation、Königshausen & Neumann (Würzburg)、2010年、(西岡あかね　担当箇所)173-179頁

Silvio Vietta／Stephan Porpmbka (編)：Ästhetik Religion Säkularisierung I: Die klassische Moderne、W. Fink (München)、2009年、(西岡あかね　担当箇所)197-234頁

## ６．研究組織

(1)研究代表者

西岡あかね（NISHIOKA AKANE）
東京外国語大学大学院総合国際学研究院講師
研究者番号：３０５５２３３５